

---

# コンビニ帰りの異世界

媛野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コンビ一帰りの異世界

### 【Zコード】

Z9182Z

### 【作者名】

媛野

### 【あらすじ】

なぜか異世界に詳しいミニズクがいて、そのミニズクを先生と敬愛する天使のような美貌の青年は異世界譚が大好きだつたりして、はたまたひょっこり現れたのは本物の異世界人！？

その異世界人に青年はいろいろな意味でびっくりしちゃつたり、させちゃつたり。そんなお話を。

夏草の茂る庭園は妖精の恰好の遊び場だった。

背の低い垣根を越えて顔を覗かせる愛らしい見慣れた顔にやさしい笑み向けるのは、この庭園と彼の背後に建つ屋敷の主だ。夜の暗闇の中でもくっきりと浮かび上がる金髪はくるりと愛らしくカールし、陽の光を知らない肌は白くきめ細やかだ。

すてきね。ほんとうに、すてきね。

美しいものを好む妖精たちがそよ風に紛れてささやき合つ。

彼はいつものように庭先に用意された椅子にゆつたりと腰掛け、机の上に分厚い本を開いた。革張りの本は流れるような美しい文字が並び、所々斜線が引かれて修正を加えている。しかしその半分以上が白紙の状態で、彼が開いたページもまた白紙だった。

少しだと、静かな庭先に羽音が聞こえてきて一羽のミミズクが舞い降りた。

「こんばんは、少年。今夜もよき月夜だ」

「こんばんは、先生。穏やかな月夜です」

向かいの空いた席の背もたれに止まつたミミズクは、さつさと羽をたたむと小さな嘴を力チカチと鳴らした。

ミミズクは彼にとつて唯一言葉を解する友人だった。彼はミミズクから聞く様々な話を手元のノートに書き取り、それを読み返すことを何よりの楽しみにしている。

「今日はどんなお話をしてくれださるのですか

待ちかねた様子で先を促す金髪の青年に、ミミズクはちよつと頭を傾げて考えてから、嘴を開いた。

「では、ある異世界の話をしよう。実は、つこ今し方コンビニに行つてきてね……」

トロイながら、ミミズクは羽を広げて見せる。

「先生、コンビニってなんですか？」

意気揚々と続きを話そうとしていたミミズクは、田の前で困り顔をつくる金髪の青年を視界に入れて、慌ててコンビニが異世界において果たす役割や仕組みをしゃべり始めた。

ようやくコンビニについての談義が終わってみると、空は白み始めた。

青年は慌てて立ち上がり、ミミズクも飛び上がった。

「先生をようならー」

「またな、少年」

ミミズクが森に向かつて飛び上がった背後で、屋敷の重い扉が閉められる音がした。

結局肝心な話はできずに、コンビニなるものに説明の時間を費やしてしまった。だが、まあいいか。

ミミズクはのんびりと朝焼けの空を飛びながら考えた。そしてその晩、いつものように夜の座談会を始めようとした一人と一羽の前に、思わず来客があつた。

Tシャツ短パン姿の、右手にコンビニ袋を提げた彼女は、短く切り揃えた髪のために男の子のようでもあつた。

彼女こそ正真正銘の、コンビニ帰りの異世界人だった。

「すみません、お茶を淹れてもうつて……いやはやー、まさか片道三分のコンビニ帰りに迷子とは世も末だね！」

彼女はティーカップに口をつけたと、「あちゅう」と顔を顰めてカップをソーサーの上に戻した。その様子をミミズクと青年はじつと見つめる。

「先生……順応能力がこうも遅しいのですか、異世界の方って」「聞くな、少年。さすがに知らん」

ぼそぼそと低い声で話しあした一人と一羽を前に、コンビニ帰りの異世界人はガサゴソとビニール袋からさきイカなど取り出してテーブルに置いた。

「これチューハイのお伴に買つてきたんだあー、うふふ。あ、そだ。お酒飲める？　ぱつと見、ハタチ過ぎているかと思ったんだけど、外人さんだから外見は大人びてるだけで判断むずかしいところじやん」

いいながらさつさと缶チューハイを一本、さきイカの隣に並べる。青年は困り顔でミミズクに視線を送った。

「少年はまだ十七歳ぐらいだ」

青年のかわりにミミズクが答えると、

「そか。やつぱりね！」

順応能力が驚異的な異世界人は、人語を話すミミズクの存在などさも当たり前だという様子で両手を胸の前で打ち合わせて笑った。 プッコンという間抜けな音を立てて缶の口を開けると、彼女は「迷子に乾杯！」と声も高らかに告げてぐいっと一口呷りさきイカの袋の封を切る。つまんださきイカをいくつか口に運ぶと、一缶をあつという間に開けてしまった。

そのたつた一缶でいい感じに酔ってしまった異世界人。珍しそうな顔をする青年にミミズクが「人種の違いでアルコールに強い者と弱い者がいるんだ」と簡単に説明する。青年はその教えを律儀に書き留め、好奇心からさきイカをひとつまみ手に取つてしげしげと観察したあと口に運んだ。

「すこしクセがありますね」  
「でもそこがおいしいんだよおー」  
「酔つていますね」  
「ね、おいしいんだおおーー」

一本目も開けてすっかりできあがつているべれけ異世界人は、もしやあーっと空いた右手でさきイカをわしづみにして、なぜか振り回しあじめた。ピヨンピヨンといくつかのさきイカがその手から零れ落ち、庭の草影に隠れていた妖精達が何事かと顔を出した。しばらく様子を覗つていた彼らのうち、勇気のある妖精がさきイカを草影に持ち帰つた。

「なんだかとても興味深いですね、異世界の方つて

机に頬杖をついた青年は向かいに座る異世界人を眺めて呟く。ミズクは首をきつちり九十度曲げるが、何も言わなかつた。

分厚い本をパタンと閉じて青年は立ち上ると、さきイカを机の上に一本一本並べているべれけ異世界人の前に膝をついて、彼女の手を握っていたさきイカ<sup>ガ</sup>と掴んだ。

「わたしの名前をあなたに教えます。わたしの名前を覚えて下さい。わたしの名前は……」

「コンビー帰りの異世界人だつた娘は気付くと近所の自販機の前にうずくまっていた。ぐらぐらする頭で記憶を辿りうと努力する。学校のテストが開けたお祝いに缶チューハイでも飲もうかとコンビーに向かい、目的のものを買い込んだ。そしてブラブラと田舎くさい畑や田んぼのそばを歩いて、道の向かい側に見える家に戻りうとして、なぜか素敵な洋館の前に辿り着いていたのだ。ああそうそう、そうだった。そこで美人さんとお茶しちゃつたのだ。その後一人で酔っぱらつちゃつて……なんか、名前を教えてくれたなあ。なんだつけ？」

必死に記憶を辿るが、何せ酔っぱらつていたので記憶があやふやだつた。

とりあえず、家に帰ろうつと。

彼女は軽くなつたコンビーのジニール袋を片手に家へ向かい、今でテレビを見ていた両親と弟に顔を見せてから自室へ引っ込む。

「よつしゃ、仕切り直しだ！」

酔いの回りが早い彼女は覚めるのも早い。少し歩いただけで気分もさっぱりだ。

とりあえず台所からサイダーとガラスコップを押借し、しわしわ

になつてゐるビニール袋からさきイカを取り出した。次の瞬間、パツと彼女の脳裏に過ぎつた言葉は声となつて現実世界に引き出された。

### 「ムーン・チャイルド」

そして現実世界に引き出されたのは言葉だけではなかつた。細く開いたカーテンの透き間から差し込んでいた月光の中に、まるでその光を溶かし込んだような金髪の青年が横たわつた状態で現れた。

唚然とするコンビニ帰りの元異世界人の目の前で彼は緩やかに伸び上がり、猫のようなしなやかさで立ち上がると宝石のような美貌で微笑んだ。

「さあ、コンビニへ連れて行つて下さい」

元異世界人の娘は、過去の自分の行いを真剣に振り返つた。そうしてゐる間にふと思いついた考え方から思考が離れなくなつて、恐る恐る青年に尋ねてみる。

「あのう、帰り方はわかつてゐるんですけど……？」

しかし返ってきたのは沈黙。そして沈黙。

ようやく口を開けたかと思えば出てくる言葉は「先生がわたしを見つけてくれるでしょう……」という頼りないものだつた。かくしていつ終わるとも知れない、元異世界人と異世界人の奇妙な共同生活が始まる。

(後書き)

あよーとワクワクする感じで終わりです。  
すぱつ「ンハビー」をきイカ、円といつ単語に吸わると思こまー。(笑)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9182n/>

---

コンビニ帰りの異世界

2010年10月9日18時27分発行